



サイエンスカフェによるこそ！ —地震・津波・原発事故・放射線—

滝澤公子，室伏きみ子 編著



本書の題名である「サイエンスカフェ」とは、1998年に英国リーズで始まった活動とされています。カフェなどで科学者・技術者と市民が、科学技術について語り合うというもので、大学等で行われる講演会などと違って、“小規模な対話形

式の集会”と位置付けられています。日本国内でも、毎月100か所近くの各種のサイエンスカフェが開催されているようです（開催案内：<http://scienceportal.jp/scicafe>）。その主催者は、大学などの公的機関から民間のNPOまで、種々あるようです。

本書は、その中の1つ、富山房インターナショナルと「日本学術会議」の主催により、東京都千代田区神田で毎月第3金曜日に開催されている“サイエンスカフェ”の忠実な記録です。富山房での「サイエンスカフェ」シリーズとしては4冊目となる本書は、2012年3月11日に発刊されました。副題は「地震・津波・原発事故・放射線」です。本書に収録されている第1項目の「地震」は、2011年2月18日の“サイエンスカフェ”における金田義行氏による「南海トラフ巨大地震への備え」の講演内容と、質疑応答の様式です。偶然取り上げたテーマ“地震”の講演の3週間後に、東北地方太平洋沖地震と津波、東京電力(株)福島第一原子力発電所事故が起こりました。そこで急遽、柴田徳忠氏による「放射線・放射能とは？その影響は？」(2011年5

月20日)、ニノ方壽氏による「福島第一原発事故をひもとく」(2011年5月20日)、島田義也氏による「放射線の生体影響について」(2011年6月3日)を開催したそうです。その後、松原純子氏による「私の放射線影響研究と低線量問題」(2011年8月19日)と柘植綾夫氏による「東日本大震災と原発事故に学ぶ」(2011年12月16日)が開催され、その内容も本書に収録されています。

本書は、図表も掲載し、講演内容とその後の質疑応答が再現されています。一方で、今回の大震災を受け、講演後に明らかとなった事実や報道内容なども“注釈”としてきちんと加筆されており、さらに、講演者自身による追加コメントも掲載され、種々の事柄が明らかになってきた現在でも、違和感のない内容に編集されています。

第1章の「南海トラフ巨大地震への備え」は、口絵のカラー写真もあり、読み進めていると何か今にもぐらぐらと揺れそうな、緊迫感のある内容です。当時は、南海トラフでの地震の可能性の方が、東日本での可能性よりずっと深刻であると考えられていました。それは、東南海の海底に設置した地震計の数が物語っています。過去のデータから、相対的な危険性が低いとみなされていた東日本ですが、地震学者である金田氏の「この教訓をどのように生かすかが責務であり、一般の方たちへの地震・津波情報の伝達の“迅速・正確さ”の重要性が、教訓として投げかけられた」という言葉は、すべての研究者に対してとも言える、大切な“研究姿勢”の問題ではないかと思いました。

第2章の「放射線・放射能とは？その影響は？」は、事故後に急遽開催され、“放射線と放射能の違い”から、半減期、自然放射線、生物影響、原発事故に伴い放出された核種とその経口、吸入摂取、それに対する対処法まで、ちょうど“放射線業務従事者への安全取扱講習”のような内容が述べられています。参加者からの質問は、リスクに関するものが多かったようです。

第3章の「福島第一原発事故をひもとく」では、東京電力(株)福島第一原子力発電所に勤務をした経験があるニノ方氏より「お話しすることが責務である」として、原発の構造から、想定される事故現場の様子まで、詳細に述べられています。質疑応答の

中に“FUKUSHIMA”が“原子力発電所事故”を指して世界的に使われるようになってしまったことに對して、原子力工学の専門家としての複雑な思いも感じられます。

第4章の「放射線の生体影響について」では、現在、科学的に知られている低線量被ばくの説明とリスクが話されています。多くの方が最も関心を持っている項目が“被ばく影響”であることが、その質疑応答からみてとれます。

第5章と第6章は、若干の時間をおいて開催されたものです。紙面の都合で詳細は割愛させていただきますが、第6章に述べられている「『人は忘れる』の原則を忘れていた」という記述は、正に今我々に突き付けられた、大切な教訓ではないかと思えます。さらに、文系理系と別れてしまう高等教育の問題点にまで踏み込んだ議論は、一読の価値があると思えます。

(古田悦子 お茶の水女子大学)

(ISBN978-4-905194-35-4, B 6 判 300 頁, 定価本体 1,800 円, 富山房インターナショナル, ☎03-3291-2578, 2012 年)

やっかいな放射線と向き合って 暮らしていくための基礎知識

田崎晴明 著

Web 上での公開を経て朝日出版から出版されることになった本書では、「はじめに」で、「これから先の長い年月、『やっかいな放射線』としっかり向き合いながら暮らしていかなければならない。そのためには、みんなの『常識の基盤』を広

げて、放射線に関わる事柄もカバーできるようにする必要が」と、本書執筆の姿勢が語られる。

事故直後からしばらくの間は、このような姿勢で

書かれたものでも、また発言された内容であっても、一般の人々の多くにとって、受け入れにくかったであろう。そのことは著者も指摘している。

今、福島第一原子力発電所の事故から1年半が経過した。まだ避難生活を余儀なくされている人もいる。避難指示区域の見直しが決定され、居住制限区域などの指定も進み始めた一方、昨年度の米の放射性セシウムの測定結果から、今年度になって水田作付け制限になった地区もある。問題は全く収束しているとは言えない。しかし、事故後最初の1年に比べると福島での生活の混乱は少なくなっているように見える。不安がゼロになったわけではないが、根拠のない過大な不安は減ってきただろう。また、除染に対する過剰な期待は減って失望をもたらした。これもまた現実に向き合う姿勢に移りつつあるように思われる。このようなフェーズでは知識の積み重ねに基づく冷静な判断へと向かう人が増えているであろう。今、本書に接して腑に落ちると感じる人が多いのではないだろうか。

私の職場である福島大学では、福島第一原発事故後緊急時の対応として専門分野にかかわらず教員有志が、他所から提供・寄贈された装置で、放射線量測定とその結果のマッピングを始めた。さらに、時間経過とともに、本来の得意分野に加えて放射能を視野に入れた専門的研究や実践も行われるようになるなど、多くの教員が原発事故に関連して様々な活動を行ってきた。他方、地元住民でもある我々は、住民の不安、特に小さい子供を持つ親の不安に向き合うことも避けては通れない。もちろん、原発事故直後からしばらくの間は、私たち自身も自分や自分に身近な人々の健康について少なからぬ不安があった。測定も行いつつ、その測定値がヒトに対して持つ意味というのを文献から調べることが、もともと放射線の人体への影響について詳細に知っているとは言えない私の不安を解消するための方法だった。

とはいえ、環境科学の一分野を専門とする私にとっては、地元で依頼された講演等で環境観測事実やフィールド科学の範囲でその解釈については語る事ができても、ヒトの健康への影響について歯切れよく語るのは困難であった。本書でもやはり分からないことは分からないと記されているが、その分からない中でどの程度の危険があるかという考え方や

